

ろまん 報農

目次

報農後援会によせる辞	塩澤宏康 (2)
日本の山間地農業は維持できるのか	米山勝美 (3)
第4回アジア植物病理会議に参加して	山際泰夫 (4)
Model Legume Congress 2011に参加して	田中佳織 (6)
APPSとPSJの学生会員交換事業に参加して	原島聡子 (8)
平成23年度事業報告及び収支計算	(11)
平成24年度事業計画及び収支予算	(12)
報農会平成23年度事業報告	(13)
報農会育英費・奨学金受給者研究課題紹介	(14)

編集後記 (15) 会員消息 (16)

特別会員名簿 (16) 育英会員名簿 (17)

役員名簿 (18)

第41号

報農後援会

報農後援会によせる辞

報農後援会会長 塩澤 宏康

報農後援会は、植物保護を通してわが国の農業者へ報恩することを念願し、昭和 36 年に設立された財団法人報農会から育英費を受けた者、海外渡航費の援助を受けた者などが報農会の活動に協力し、会員相互の親睦、情報交換などを目的として、平成 2 年（1990 年）に結成されました。

初代会長の故本間保男氏のご尽力により、報農会の年間の事業による収支に少しでもプラスなればということで、シンポジウム「植物保護ハイビジョン」の開催を立ち上げました。また、「ろまん報農」の発刊などに伴って会員の皆様から納入された会費のうち、一人分の育英費に当たる金額を報農会に寄附することも、今日に引き継がれています。

21 世紀において解決されるべき大きな課題は「食料の確保」と「環境の保全」です。いずれも人間の社会に欠かす事が出来ない問題であり、植物の有効利用がその基盤であると考えられます。植物保護分野における研究の発展とその成果の活用は、食糧生産と緑の保全のために重要な役割を担っていることは間違いありません。

報農後援会における諸活動を益々活発にし、これからも植物保護に関わる方々の情報交換や研究発展に寄与できることを願っています。同時に、この「ろまん報農」が会員の皆様のご協力により長く続き、会員を結ぶ絆となってお活躍の一助となることを願っています。

日本の山間地農業は維持できるのか

米 山 勝 美

月日の経つのは早いもので、「光陰矢のごとし」とはよく言ったものです。大学を卒業して研究所や大学に勤めて瞬く間に40年以上が経過し、この3月で定年と言う人生の節目を迎えることとなりました。今後は残された時間を旅や念願の家庭菜園など自然と接しつつスローライフな時を送ることにしました。

そんな事で、幸い子供の頃住んでいた山梨の山間地にある古い実家の土地を開墾し、家庭菜園を始めることに決め、早速計画を始めました。ところが、大変なことにイノシシやアナグマなどの野生動物やカラスなどの鳥類の害を受け、収穫は皆無になることが分かりました。まずは畑の動物侵入防止フェンス作りから開始することとなりました。まさに困りの中の農業です。この地は山間地とは言え、奥深い山中でもなく、甲府盆地の平地から徒歩で15分程度の低山間部であり、子供の頃は鳥獣害の被害など殆どなかった長閑な山村農業地帯でした。ここ数十年でこの地も他の山間地農村と同様に、残念ながら俗に言う限界集落となり耕地の荒廃化はいなめません。

どうして、このような状況になってしまったのか。戦後の針葉樹への植栽奨励も少なく広葉樹が十分に維持されている地域であることから、動物の餌不足による出没とは考えられません。農地の荒廃化もありますが、やはり被害を助長したのは十年以上に渡るイノシシなど野生動物の捕獲禁止による個体数の増加だと考えられます。さすがに今は冬季の捕獲が許されましたが、すでに次期遅く山林が藪化して猟師が山中に入りイノシシを狩猟できる状況ではありません。さらにシカやサルが出没することになれば、家庭菜園すら維持することは難しく、この地の山村は限界集落から滅亡集落へと変わることは一目瞭然です。この状況は溪流釣りに行く長野の山村地でも同様であり、過疎化と動物被害で日本の山間地農業はいずれ消滅への道を進むことになるものと危惧されます。日本の農地に占める山間農地の割合は大きく、山間地農業は食料生産においても山紫水明な環境を保護する意味においても重要な役割を担ってきました。野生動物保護も大切ではあるが、山間地農業を維持することが人間と野生動物のバランスを保ち共存する上で重要ではないだろうか。

今年、米国のトウモロコシ生産量は干ばつによる影響で例年の約20%減であると推定されている。地球の気候変動により毎年世界の食料が順調に確保できるとは限らない。食料はできる限り自国で賄えるような政治と行政をお願いしたいものである。

第4回アジア植物病理会議に参加して

岡山大学大学院自然科学研究科バイオサイエンス専攻 山際 泰夫

第4回アジア植物病理会議が2011年4月26日から5日間の日程でオーストラリアのダーウィン市のコンベンションホールで開催されました。この会義は第18回オーストラリア植物病理学会（隔年開催）とのジョイントの会議で、日本、韓国、中国、インドネシア、シンガポール、ベトナムなどアジア諸国並びにオーストラリア、ニュージーランド等オセアニアから各国の植物病理学会長を初め400名以上の研究者が出席し、特にアジア諸国の食料や生物資源生産上の重要課題となっている新病害の同定や対策に関する300題を超える研究報告と討議がされました。報農会の援助を頂き、私は今回初めて国際会議に参加し、大変貴重な経験をさせて頂きました。深く感謝致しますとともに、その一端を報告させて頂きます。

日本からはケアンズ経由でダーウィンへ向かいました。ダーウィンはオーストラリア大陸の北端にあるリゾート地で、オーストラリア国内からも多数の老若男女が集まります。熱帯の気候で昼間はかなり暑いですが、日本の夏と異なり湿度が低いせいか、木陰に入ると涼しく感じました。日本との時差は小さく（州により異なります）、ここでは0.5時間の差で、時差ボケの心配はありませんでした。空港の検疫は極めて厳重で、農畜産物の大輸出国であるオーストラリアが如何に植物防疫上のセキュリティ(Plant biosecurity)に、非常に大きな努力をしていることを実感しました。

本学会は26日の17:00からのウエルカムレセプションから始まりました。その中で偶然に隣席したオーストラリア国立の研究機関の研究者の方と挨拶を兼ねて、私のポスター発表の研究である“A volatile substance from *Talaromyces* sp. promotes plants growth and suppresses the development of diseases on several plants”のお話をさせて頂きました。以下お話の内容です。私の研究は、圃場から分離同定したPGPF (plant growth promoting fungi) の *Talaromyces wortmannii* が少なくとも7種の揮発性物質を生産し、その1つがセスキテルペンの1種の β -caryophylleneであることを明らかにし、さらに、 β -caryophyllene がコマツナ（アブラナ科）やキュウリ（ウリ科）に対して生育促進作用と、炭疽病菌に対する耐病性増進作用を示すことを明らかにしたものです。同様な作用は、タバコ（ナス科）やモデル植物の *Arabidopsis thaliana* でも観察されることを見いだしました。さらに、*A. thaliana* (Col-0) を供して β -caryophylleneの防御関連遺伝子の発現レベルで解析した結果、*pad3*, *pal2*, *npr1*, *pdf1.2*, *pr1*, 発現が上昇するこ

とを明らかにしました。すなわち、 β -caryophyllene は植物の生育促進作用だけでなく、Induced systemic resistance (ISR)を誘導する物質でもあることを突止めました。今後は、農業生産における有効活用を目指し、本学会の課題でもあるアジア諸国の諸病害の対策の一助となることを目指しております。このような内容でお話ししました結果、その方は大変興味を示され、学会の Proceeding 集を開かれ（私の英語がうまく伝わらなかったから？）プログラムで確認されました。そうすると、私の欄に既にチェックが入れてあり、驚くと同時に私の研究に興味のある方がオーストラリアに存在したことに大変感激致しました。また、その方の研究についてお伺いしたところ、ジャガイモの貯蔵時の腐敗菌を防除するために essential oil を有効活用する研究をされているとの事で、理解しました。

27日は、午後からはいよいよ Poster Session で多少緊張しましたが、中国の大学の助手の先生や、タスマニア島にある民間の検査機関の研究者が熱心に私の拙い説明を聞いて頂き大変嬉しく思いました。なんとか無事に Poster Session も終わりましたが、英語力の向上の必要性を強く感じることができました（同時に大変疲れましたが）。

本学会では、農業生産の現場により近いところでの植物病理の研究報告が多くされ、重要な病害について討議されました。特に土壌病害が大きな問題として取り上げられ、中でも *Fusarium* 属や、*Pythium* 属による土壌病害に関する同定や対策について多くの報告があり、活発に討論されました。

今、世界の食糧事情は、穀物生産量の需要と供給のバランスが危うくなり、穀物の価格が急騰しています。原因はいろいろありますが、下記の様な事が考えられます。

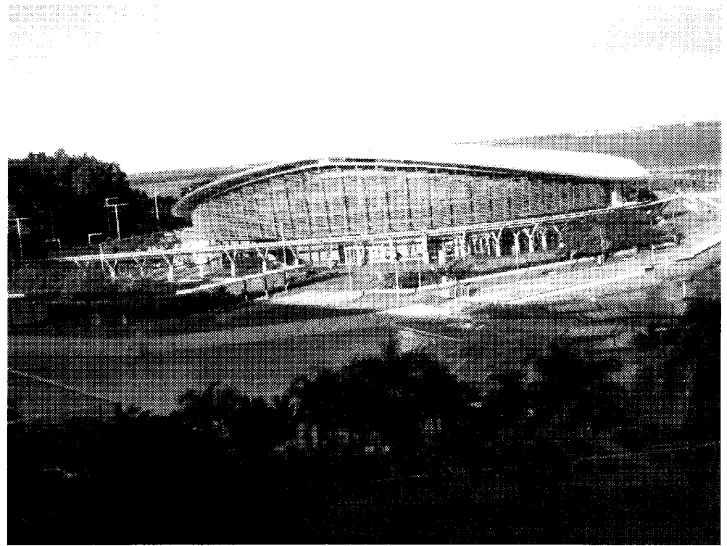
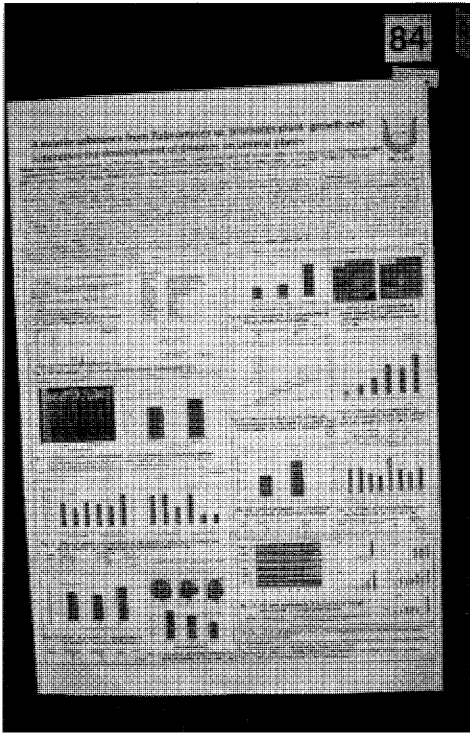
1. 原油高騰により、穀物からアルコールを生産し、食用以外の穀物の需要が増加した。
2. 中国が人口増等の理由でトウモロコシの輸出国から輸入大国に変貌した。
3. ロシアにおけるコムギの不作により禁輸措置がとられている。
4. オーストラリアにおける早魃でコムギの収穫が大きく減少した。

この様な状況の中で開催された本学会は、食糧問題の解決に直接的に、また間接的に貢献することができる様に強く感じました。

ところで最近、日本の学生は内向な志向が強く、留学する学生数が減少しているそうです。このような傾向について憂慮されておりますが、今回の経験から、実際に海外に出てみると、内向な志向が変わるのではないかと思います。それに加えて、やはり英語力の向上が欠かせない事を痛感いたしました。

最後になりましたが、貴報農会の国際学会渡航費援助の御蔭で言葉では表現できないほどの貴

重な経験をさせて頂きありがとうございました。心から感謝申し上げます。



Model Legume Congress 2011 に参加して

岡山大学大学院自然科学研究科生物圏システム科学専攻 田中 佳織

マメ科のモデル植物をテーマとした第2回国際会議（Model Legume Congress 2011）が2011年5月15日から19日、南仏のサント・マキシム市で開催されました。日本から遠く離れた国での開催でしたが、報農会からの渡航費のご援助により参加することができました。心より御礼申し上げます。

この会議では、マメ科の主要穀物であるダイズその他、モデル植物（ミヤコグサやタルウマゴヤシ）を研究材料として扱っている研究者が集い、私が専攻している植物病理学の分野だけでなく、遺伝学や生理・生化学、生物情報学など様々な分野の発表が行われました。期間中、「Genetics & Genomics approaches」、「Biodiversity & Ecology」、「Signalling & Regulation」、「Symbiosis」、「Interaction with Pathogens」、「Responses to Abiotic Stress」、「Development」ならびに「Bridges to Legume Crops」のそれぞれの分野からの基調講演、口頭発表およびポスター発表

がありました。連日、午前 8 時半から午後 10 時までプログラムが予定されており、最先端の研究や世界の動向について知ることができました。ポスター発表は 2 日目と 3 日目の午後からあり、計 78 題の発表がありました。その中で私は 3 日目の午後に「Interaction with Pathogens」のセッションでポスター発表に参加しました。

私は、「Role of cell wall-associated ATPase/apyrase in cowpea-*Mycosphaerella pinodes* nonhost interaction」という演題で発表をしました。その内容は、ササゲの病原菌に対する初期応答について、特に植物に固有の細胞壁が備える異物認識と防御応答の分子機構について発表しました（写真 1）。海外での初めての学会発表ということもあり、ポスターの作成においても多くのことを学びました。これまで取り組んできた卒業論文研究や修士論文研究の成果をまとめる良い機会になりましたが、反面、人に伝わる実験データの表現の仕方やそれらを英語で説明する難しさを改めて痛感しました。しかし、様々な国の研究者の方と会話を交わし、貴重な意見やコメントを貰うことができ、今後の目標を定めることもできました。何よりも、自分の研究に興味や関心を持って貰えることの喜びや意見を交わすことの面白さを知ることができたことが一番の収穫ではなかったと感じられます。

発表の時間以外にも、食事やエクスカージョンなどで様々な国の人とコミュニケーションを図る時間がありました。学会には 20 ヶ国以上の国からの参加者があり、研究の話以外にも自国の文化や習慣などについて話す機会もあり、見識を広げることができました。

サント・マキム市は南フランスの地中海に面しているため、1 年のうち 300 日以上は晴れという非常に気候に恵まれた街で、私が滞在した 5 日間も雲一つない晴天でした。街並みは大変美しく、写真でしか見たことがなかった地中海沿岸の風景と同じものが目の前に広がっていました。白い壁と赤い屋根が連なり、その街並みが海を背景にした時のコントラストの美しさは今でも忘れられません。また、エクスカージョンで訪れたサント・ロペ市では、ちょうどお祭りが行われており、昔ながらの服を纏った人々によるパレードに出くわし、人々の活気に満ち溢れた街並みを満喫することができました。帰路には、幸運にも飛行機の待ち時間を利用して、パリ市内シテ島のサント・シャペルに立ち寄ることができました（写真 2）。

これらの経験は今後の研究への大きな糧にしたいと思います。最後に、報農会の関係者の皆様に、改めて心より感謝申し上げます。有難うございました。

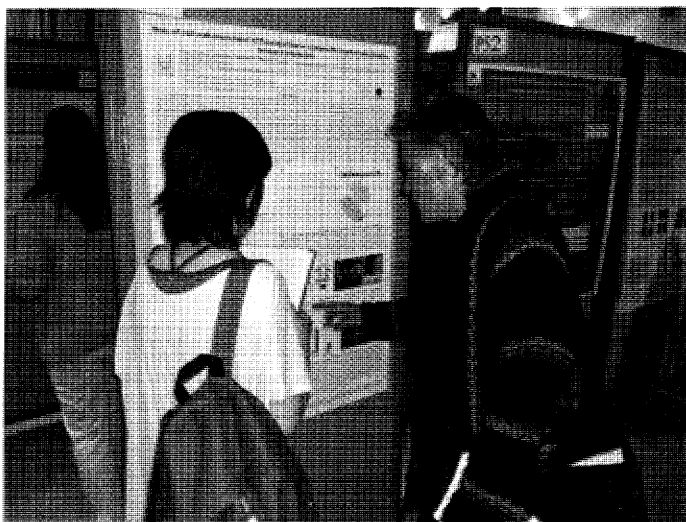


写真1 ポスター会場にて(↑)

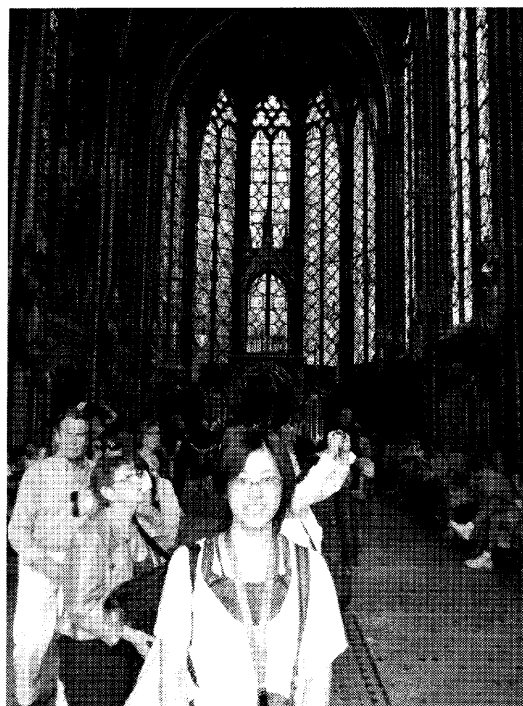


写真2 サント・シャペルにて (→)

APPS と PSJ の学生会員交換事業に参加して

東京農工大学大学院農学府生物制御科学専攻植物病理学研究室 原島 聡子

私は10月4日から10月19日まで日本植物病理学会 (PSJ) と Australian Plant Pathology Society (APPS) の相互の理解と交流を目的とした学生会員交換事業に参加し、オーストラリア・タスマニア州ホバートに滞在しました。事業への参加が確定したのが8月末であり、出発までの期間および滞在期間が短いために奨学金を得ることが難しかったのですが、報農会より国際会議渡航旅費のご支援をいただき、参加することができました。

本事業の中で、School of Agricultural Science, University of Tasmania (UTAS)が行っている研究であるアメリカンチェリー農園における病害発生調査および殺菌剤の選定試験の実施に関わることができました。タスマニアの主な農産物は葉菜類、核果類、ナッツ、オリーブ、アメリカンチェリー等であり、リンゴやアメリカンチェリーは主に東南アジア、ヨーロッパ、インドに輸出されています。従来、タスマニアではアメリカンチェリーの病虫害は少なく、多くの圃場は鳥よけのネットで覆われているだけで、農薬散布はほとんど行われていませんでした。しかし、今

回の試験で訪れた UTAS から車で 2 時間ほどの距離にあるアメリカンチェリー圃場では、さび／うどんこ病様の症状が発生している果樹が多く見受けられました。この防除のために農家の方と協力して、薬剤散布の必要性、使用薬剤の選抜、最も効果の高い散布条件について試験を実施しました。具体的には、農園の一区画において殺菌剤高濃度処理、低濃度処理、無処理の調査対象果樹をそれぞれ無作為抽出し、幹に印を付けるという作業を行いました。実際の殺菌剤散布には立ち会うことができませんでしたが、現場の圃場へ赴き、農家の方と協力しつつ病害防除方法を実験・指導するという体験はとても刺激的で、私たちの植物病理学研究と農業現場との繋がりを体感できました。

また、タスマニア島から約 1400km 離れた無人島マクアリー島の固有種 *Azorella macquariensis* (セリ科の一種) の病害に関する研究にも携わることができました。マクアリー島は 1997 年にユネスコの世界遺産 (自然遺産) に登録されていますが、大型植物がほとんど育たない寒冷な環境であるため、島の地表の約 45 % が小型の顕花植物、地衣類、苔類で覆われています。*A. macquariensis* はその最優占種ですが、2008 年に本種の病害 (Cushion Dieback) が大発生し、その原因究明と種の保存を目的とした研究のために、翌年からタスマニア島の王立植物園で *A. macquariensis* が栽培されています。本病害は様々な因子が関与すると考えられており、それら原因究明の研究の一環として、私はマクアリー島でサンプリングされた罹病個体、健全個体、およびその周囲の土壌から全 DNA を抽出し、それらの eDNA 情報からどのような微生物が含まれているのかを調べました。今後、このような研究を通じて病原関連微生物が特定されれば、PCR を利用した簡便な病害診断、防除試験も可能となり、貴重な植物種の保存に貢献できると思います。

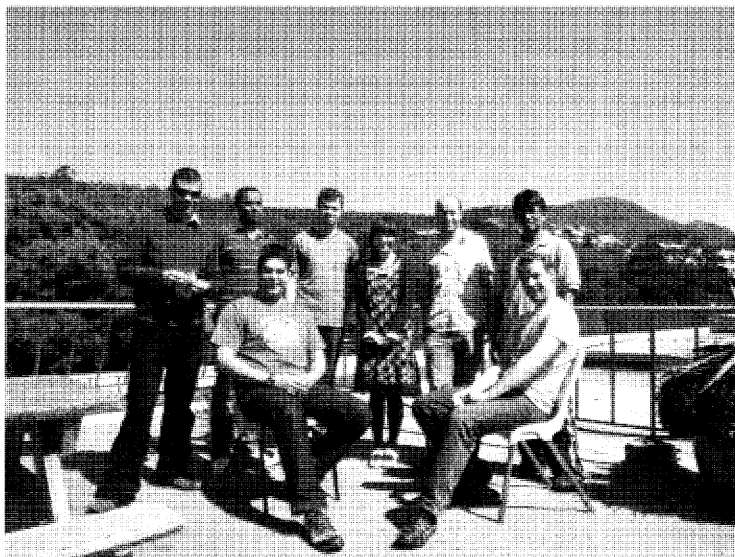
この他には、ユーカリ属樹木の病原ウイルスを媒介する昆虫における、ウイルスの保毒率調査にも帯同して、熱帯雨林や乾燥地帯のユーカリの森、背丈の低いボタングラスの湿原など、非常に多様な植物相を目にすることができました。タスマニア島という大陸から独立した環境で進化を遂げた植物には特殊な構造や生活環を持つものがあり、大変興味深いものでした。

UTAS には様々な出身国の学生がおり、彼らと環境問題や遺伝子組換え作物といった様々なトピックで議論を交わせたことも、とても有意義でした。彼らとは現在もインターネットを通じて

交流を継続しており、お互いの研究報告や情報交換をしています。その中でグローバルな視野を持つことの大切さ、そして難しさを実感しています。

派遣期間中は Caroline Mohammed 先生や博士課程の学生である Ms. Parry-Jones の家庭にホームステイさせていただきました。彼らと一緒に食事や映画・音楽鑑賞、バーベキューなどを体験でき、貴重な異文化交流ができました。

報農会の国際会議渡航旅費のご支援により、このような貴重な体験をすることができました。上路先生をはじめ報農会の皆様に、心から感謝申し上げます。



← UTAS にて、同室の学生たちと

チェリー農場にて →



平成23年度事業報告

1. 会誌『ろまん報農』の発行・配布
『ろまん報農』第40号を9月に発行、全会員に配布した。
2. 報農会シンポジウム『植物保護ハイビジョン-2011』“昆虫や種苗がまん延させる病害の脅威”（9月28日 「北とぴあ」つつじホール）の開催に当たり実行委員として協力した。
3. 報農会の運営を援助するため、20万円を寄付した。
4. 本年度は特別会員として1名が入会され、特別会員3名の訃報が届いた。

平成23年度収支計算（自平成23年4月1日 至平成24年3月31日）

収入の部		(単位：円)		
科目	予算額	決算額	比較増減	備考
会費	308,000	242,000	△ 66,000	
育英会員会費	140,000	120,000	△ 20,000	
特別会員会費	168,000	122,000	△ 46,000	
賛助会員会費	0	0	0	
前受会費	2,000	8,000	6,000	次年度以降会費
寄付金	50,000	82,000	32,000	
雑収入	782	1,916	1,134	預金利息
前期繰越金	182,218	182,218	0	
収入合計	543,000	516,134	△ 26,866	
支出の部				
科目	予算額	決算額	比較増減	備考
事業費	100,000	85,875	△ 14,125	会誌発行
管理費	120,000	47,270	△ 72,730	
会議費	20,000	13,360	△ 6,640	
旅費交通費	10,000	8,000	△ 2,000	
通信運搬費	40,000	25,280	△ 14,720	
消耗品費	20,000	630	△ 19,370	
雑費	30,000	0	△ 30,000	
寄付金	200,000	200,000	0	(公財) 報農会へ
予備費	121,000	0	△ 121,000	
前受会費	2,000	8,000	6,000	
次期繰越金	—	174,989	174,989	
支出合計	543,000	516,134	△ 26,866	

平成24年度事業計画

1. 会誌『ろまん報農』の発行・配布
『ろまん報農』第41号を発行し会員に配布する。
2. 公益財団法人報農会の諸事業（シンポジウム開催など）に協力し、植物防疫事業の推進にあたる。
3. 公益財団法人報農会の運営を支援するための寄付を行い、その事業推進に資する。
4. 会員増を図る一環として、植物保護関係者に会員への入会案内を機会をとらえて行う。

平成24年度収支予算（自平成24年4月1日 至平成25年3月31日）

収入の部				単位：円
科 目	予 算 額	前年度決算額	比較増減	備 考
会 費	290,000	242,000	48,000	
育英会員会費	144,000	120,000	24,000	132名
特別会員会費	146,000	122,000	24,000	91名
賛助会員会費	0	0	0	(終身会員の会員を除く)
前受会費	0	8,000	△ 8,000	次年度以降会費
寄付金	50,000	82,000	△ 32,000	
雑収入	1,011	1,916	△ 905	預金利息他
前期繰越金	174,989	182,218	△ 7,229	
収入合計	516,000	516,134	△ 134	
支出の部				
科 目	予 算 額	前年度決算額	比較増減	備 考
事業費	100,000	85,875	14,125	会誌発行他
管理費	120,000	47,270	72,730	
会議費	20,000	13,360	6,640	
旅費交通費	10,000	8,000	2,000	
通信運搬費	40,000	25,280	14,720	
消耗品費	20,000	630	19,370	
雑費	30,000	0	30,000	慶弔見舞他
寄付金	200,000	200,000	0	(財)報農会へ
予備費	96,000	0	96,000	
前受会費	0	8,000	△ 8,000	
次期繰越金	—	174,989	△ 174,989	
支出合計	516,000	516,134	△ 134	

注) 別会計に河野基金100万円の定期預金がある。

公益財団法人 報農会 平成 23 年度 事業報告

1. 植物防疫に関する学術・技術分野における専門家の育成

- (1) 育英費の支給：4名の大学院生に対し育英費を支給した。
- (2) 奨学金の供与：5名の農業大学校在学学生（農家子弟）に対し、奨学金と賞状を贈呈した。

2. 植物防疫に関する学術・技術の交流

国際交流に対する援助：国際学会出席者2名及び海外への留学生1名に対し渡航旅費の一部を援助した。

3. 植物防疫の発展に寄与した功績者の表彰（第26回）

功績者の表彰式を平成23年9月28日に「北とぴあ」天覧の間で行い、葛西辰雄、高橋俊作、竹澤秀夫、千葉馨、平山成一の5氏に功労賞を贈呈した。

4. 植物防疫に関する公開シンポジウム（第26回）の開催

『植物保護ハイビジョン—2011』“昆虫や種苗がまん延させる病害の脅威”をテーマとして9月28日に「北とぴあ」つつじホールで開催した。（参加者約300名）

講演

- | | | |
|---------------------|----------------------------|-------|
| ○種苗検疫の現状と課題 | 農林水産省横浜植物防疫所 | 古澤 幹士 |
| ○種苗生産・流通における病害虫管理 | (株)サカタのタネ | 加来 久敏 |
| ○ウメ輪紋ウイルスの発生と防除 | 法政大学生命科学部 | 西尾 健 |
| ○カンキツグリーンング病の発生と防除 | | |
| | (独) 農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所 | 岩波 徹 |
| ○ウリ類退緑黄化病の発生と防除 | 熊本県農業研究センター | 行徳 裕 |
| ○ウリ類果実汚斑細菌病の特徴と防除体系 | | |
| | (独) 農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所 | 白川 隆 |

5. 創立50周年記念事業

平成23年9月28日に「北とぴあ」つつじホールにおいて記念式典を行い、農林水産大臣から感謝状を授与される栄に浴するとともに、永年にわたり報農会の各種事業、とりわけシンポジウムの開催に協力いただいた方々（10名）に感謝状及び記念品を贈呈し、感謝の意を表した。

また「“ものづくり”と生命、食糧、環境」と題し、帝京平成大学教授・東京大学名誉教授北原 武氏による記念講演が行われた。

6. その他の事業

報農後援会の事務を処理し、会誌『ろまん報農』第40号の発行を支援した。

公益財団法人 報農会 育英費・奨学金受給者研究課題の紹介

1. 育英費

馬場 陽平（筑波大学大学院生命環境科学研究科博士前期課程）

『薬用植物からの植物成長制御活性を有する揮発性物質の探索とそれらの作用機序に関する研究』

小松原慈人（東北大学大学院農学研究科修士課程）

『害虫防除剤の開発に利用可能な桑由来の成分に関する研究』

柏 毅（東京農工大学大学院農学府修士課程）

『キャベツ萎黄病菌の病原性関連因子の分子生物学的解析』

堀田 佳祐（岐阜大学大学院応用生物科学研究科修士課程）

『各種 *Pythium* 属菌の分類及び検出法の開発』

2. 農家子弟奨学金

高橋 修平（山形県立農業大学校）

『輪ぎくの10月出し抑制栽培とダミノジット処理による花首伸長の抑制効果の検証』

恩田 悠人（千葉県農業大学校）

『ナシ新品種「豊華」の黒星病をはじめ主要病害に対する耐病性と果実品質並びに生育の特性に関する研究』

保富 舞（奈良県農業大学校）

『植生管理を利用した環境に優しい夏秋ナス栽培の検討』

吉井 悠起（鳥取県立農業大学校）

『アールスメロン栽培における総合的病害虫管理（IPM）の効果』

長尾 美希（佐賀県農業大学校）

『佐賀平坦地域における病害虫削減による四季成り性イチゴの生産』

公益財団法人 報農会 役員名簿（平成24年10月1日現在）

理事長：上路 雅子

常務理事：正垣 優

理事：田付 貞洋 堀江 博道

監事：上山 功夫 松木 三男

顧問：岩本 毅 八反田一三 吉田 孝二

編集後記

ここ何年も編集後記に“今年は異常気象で…”と書いてきたように思う。“例年に比べ”の“例年”というのは何時のことだったのだろうかと思ふ。

アメリカでは干ばつでトウモロコシが枯れてしまい、日本では局地的な豪雨が何回も起きて大きな被害が…。また、日本では去年までは熱帯夜続きと言われていたのに、今年はそれどころか酷暑日続きで、熱中症で亡くなる人が増え続けている。

筆者も昨年よりエコのためにグリーンカーテン作りにトライして悦に入っていたのだが、今年はいくら頑張ってもゴーヤの葉っぱがしんなりとしてしまい、隙間だらけ。暑い日差しがもろに部屋に入ってきて、ついついエアコンと仲良くしてしまっている。私の腕が悪いせいかと思ったが、近所を見回してもグリーンカーテンは上手くいっていないようで、複雑な気持ちである。

農業に対し不安だらけの今日この頃だが、田舎から送られてきた桃はひときわ甘くて、救われた気持ちがした。

今号には、今春、明治大学を退官され、現在、山梨のご実家で農業に勤しんでおられる米山勝美氏から巻頭言をお寄せいただきました。また、報農会から渡航費の援助を受けられた3名の方々からも報告書を寄稿していただきました。有り難うございました。この誌面を借りてお礼申し上げます。

会員通信である「ろまん報農」も年1回の発行ですが、長く続きますように会員の皆様の特段のご協力をお願い致します。

7月発行の予定が、諸般の事情によりたいへん遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

(塩澤宏康)

- 皆様のご支援に深くお礼申し上げます。
- 後援会費は年2,000円です。会費の一部は本会の主旨により「(公財)報農会の発展」のために寄附させていただいております。
- 会報発行等の事業を円滑に進めるため会費納入について、皆様のご協力をお願い致します。
- 郵便振替口座番号 00140-1-121402

第41号 平成24年10月1日発行
 発行者 塩澤宏康
 発行所 報農後援会
 〒187-0011 小平市鈴木町2-846-105
 サンウッド花小金井101
 TEL・FAX 042-381-5455

☆☆〔 会 員 消 息 〕☆☆

○農学賞に輝く特別会員

田付 貞洋氏（報農会理事、東京大学名誉教授）には、日本農学賞（読売農学賞）を受賞され、平成24年4月5日、東京大学山上会館で授与式が行われました。心からお慶び申し上げます。

受賞研究：昆虫のフェロモンに関する研究およびその展開

○訃 報 特別会員 武市 敏男氏（平成24年2月28日逝去）

仲川 正義氏（平成24年3月12日逝去）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

報農後援会特別会員名簿（24.9.30現在 98名）

荒木 隆男	有本 裕	池庄司敏明	池田二三高	池山 雅也	伊藤 嘉昭
稲葉 忠興	岩井 久	岩田 俊一	上垣 隆夫	上野 誠	上山 功夫
内田 俊郎	梅田 芳春	遠藤 武雄	大内 成志	大川 義清	大畑 貫一
岡留善次郎	利部 伸三	加来 久敏	梶原 敏宏	加藤 肇	神田 昭夫
北 宜裕	国見 裕久	久能 均	久保 康之	小林 直人	小林 義明
小原 裕三	近藤 和信	後藤 哲雄	重松 喜昭	獅山 慈孝	篠原 正行
下村登志雄	管原 敏夫	杉野多萬司	鈴木 昭憲	鈴木 健	鈴木昭治郎
関口 義兼	多賀 正節	高久 恒夫	高田 昌稔	高橋 史樹	高橋 信孝
高橋 英樹	瀧川 雄一	竹田 勇	多々良明夫	田付 貞洋	館野 浩一
田中 敏夫	谷口 武	田畑 勝洋	田濱 康夫	田村 多利	土屋 健一
都築 詢	露無 慎二	寺岡 徹	寺中 理明	藤條 純夫	仲井まどか
中北 宏	根本 久	橋本 晃	早川 充	平井 一男	平塚 利子
平野 恒	古市 尚高	古澤 巖	古橋 嘉一	堀川 知廣	牧野 孝宏
松本 義明	松山 宣明	満井 喬	宮田 正	務川 重之	室伏 旭
八木 繁実	矢野 文雄	山岡 直人	山口 勇	山下 功	山下 修一
山中 達	山根 久和	山本 出	横田 孝雄	吉田 孝二	吉野 嶺一
米山 伸吾	與良 清				

報農後援会育英会員名簿 (24.9.30現在 132名)

() 内は年次順番号

桜井 成 (2) 安田 康 (4) 小泉 銘冊 (6) 谷口 尚温 (7) 小島 誠 (8)
 上村 英雄 (9) 池上 晋 (11) 永田 徹 (12) 中山 勇 (15) 岡田 大 (18)
 林 上珍 (19) 小嶋 昭雄 (20) 善林 六朗 (21) 荒井 啓 (28) 桜井 宏紀 (29)
 大橋 祐子 (30) 伊藤 達也 (31) 櫛下町鉦敏 (32) 木村 滋 (33) 川田 雅昭 (35)
 道家 紀志 (36) 小島 峯雄 (37) 盛一 嘉則 (39) 山崎 素直 (41) 廬 耀村 (45)
 児玉 吉勝 (46) 岡本 恵勝 (47) 米山 勝美 (49) 近藤 栄造 (51) 汐崎 正生 (53)
 本間 善久 (54) 湯本 悦次 (55) 浜村 徹三 (56) 宇佐美 進 (57) 中野 昌俊 (61)
 本田要八郎 (62) 重光 善弘 (65) 松本 勤 (67) 重野 武夫 (68) 本山 直樹 (71)
 塩澤 宏康 (72) 平井 正志 (79) 大内 晴 (80) 田代 茂喜 (84) 森 章夫 (85)
 与那覇哲義 (86) 守山 義明 (88) 神谷 勇治 (89) 山口 堯士 (91) 山口 裕紀 (92)
 井上 智広 (93) 小林 紀彦 (94) 仲谷 房治 (96) 日比 忠明 (99) 大嶋 保夫 (101)
 芦原 亘 (102) 桜井 勇 (103) 松下 一信 (105) 明田 功 (106) 吉川 博道 (108)
 橋本 伸一 (109) 倉持 正実 (110) 宇郷 裕三 (111) 佐藤 五月 (115) 伊藤 高明 (116)
 今野 清隆 (118) 古川いくよ (120) 小金澤碩城 (122) 小野 知洋 (126) 林 三徳 (129)
 落合 進 (131) 廣岡 芳年 (133) 野田 博明 (135) 大塚 公人 (136) 武田 敏夫 (139)
 加藤 重博 (140) 矢野 栄二 (144) 渡辺 司 (147) 安田 誠 (148) 井上 博雅 (149)
 中川 仁 (153) 上運天 博 (156) 小作 明則 (159) 久場 洋之 (161) 向島 博行 (162)
 景山 幸二 (165) 尾崎 政博 (166) 川原 圭生 (171) 松尾 憲絵 (172) 名和 哲夫 (176)
 奥田 隆 (178) 橋本 恵子 (179) 嶋田 正和 (180) 川北 一人 (181) 鳴海 金吾 (182)
 門馬 孝之 (184) 横山 和成 (186) 若山 健二 (187) 齋藤弥生子 (189) 柘植 尚志 (191)
 藤巻 伸一 (195) 沢辺 京子 (197) 船城 衛介 (200) 黄 思良 (205) 大海みゆき (206)
 諸岡 直 (207) 河合 守雄 (208) 榊原 隆 (209) 梁 泳烈 (210) 郡嶋 浩志 (212)
 長門 渉 (213) 張 蘊恵 (217) 廬 聖煥 (219) 藤田 昭彦 (221) 布目 司 (222)
 吉賀 豊司 (224) 崔 用華 (225) 田中 弘幸 (226) 王 敬銘 (227) 大島 由行 (230)
 門 宏超 (232) カルニンチ寛子 (233) 長岡 真帆 (236) 大野 彩 (237) 和田 行央 (241)
 中村 正幸 (243) 瀧 瑞人 (244) 成田 匡邦 (246) 加藤 ハナ (250) 藤田 景子 (251)
 高橋 祐子 (259) 水野 壮 (264)

報農後援会 役員名簿 (平成24年度)

会 長： 塩 澤 宏 康

常任理事： 井 上 智 広 (アグロカネショウ(株))

重 野 武 夫 (シンジェンタジャパン(株))

野 田 博 明 (農業生物資源研究所)

理 事：◆東日本地区〈北海道・東北・関東・甲信越〉

古 市 尚 高 (新潟大学)

◆中日本地区〈東海・北陸・近畿〉

景 山 幸 二 (岐阜大学)

◆西日本地区〈中国・四国・九州〉

岩 井 久 (鹿児島大学)

監 事： 日 比 忠 明

米 山 勝 美

顧 問： 荒 井 啓

上 村 英 雄

小 島 誠

近 藤 栄 造